

2023年12月3日 アドベントⅠ

説教題「『クリスマス』はいらない」イザヤ書9章1～6節

主任牧師 加藤 誠

「闇の中に歩む民は、大いなる光を見／死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた。」(イザヤ書9章1節)

宗教改革者のマルチン・ルターは「聖書は三つの方法で読まれることを求めている」と語りました。一つは「一人で」読まれること。二つ目は「礼拝の中で朗読される」こと。そして三つ目は「交わりの中」で読まれることです。

このルターの言葉はわたし自身の実感とも重なります。「今日の自分のために聖書は何を語ってくれているだろうか?」。わたし自身の中に「求め」がない限り、聖書が「命の言」としてわたしに迫ることはありません。ただ、一人だけで聖書を読むのはとても難しいことです。聖書は「食べにくく、理解に難しい箇所」も多いからです。そんな時に礼拝の中で朗読される聖書の言葉が、静かに心に染みるときがあります。自分の求めを越えた聖霊の働きにより「命の言」がわたしの心に届けられるのです。また、わたしが牧師の働きに立つのに大きな励ましを受けるのが「教会の交わりの中で読む」聖書です。例えば、朝の祈禱会での御言葉の分かち合いを通して、御言葉が新たな光となって心を照らし出してくれる喜びは他に代えがたいものがあります。

2か月ほど前「エズラ・ネヘミヤ・エステル記」を読んでいた時のこと。ある方が「エズラ・ネヘミヤ」はバビロン捕囚後、祖国に戻って神殿の再建に尽力した人たちの物語、「エステル」は捕囚後もバビロンに残り続けた人たちの物語だが、聖書は祖国に戻って苦勞した人たちを「頑張った人」、祖国に戻らずバビロンに住み続けた人たちを「頑張れなかった人」というような区別をしていない。神さまはそれぞれの選びとした人びとに大切な働きを委ねておられるのだ…と思うと語られました。

教会の交わりには「前に進む人」だけでなく「今は前に進めない人」も集っています。「喜びの中に進む」ことができる人もいれば「悲しみや痛みをじっと抱えて歩んでいる方」もおられる。いろいろな人生の事情を歩んでいる人たちが交錯する交わりです。だから決して「一色」ではない。みんな「こうあらねばならない!」ではない。一人ひとりの歩みを慈しみの光で照されるインマヌエルの主を真ん中に、「お互いを静かに覚え、祈りつつ歩むよう招かれている交わり」であることを覚えたいのです。

さて今日からアドベントに入りますが、馬小屋にお生まれになった方に心を定めて、一人ひとりが聖書を開き、また交わりの中で主に尋ね求めていきたいのです。私たちの人生に「同じ一年」がないように、クリスマスの意味は毎年「違う」はずです。もし「カレンダーが12月になったから、そろそろクリスマスの準備をしないと…」とか「クリスマスだから『きよしこの夜』を歌わないと…」と程度の理由から、また「教会がクリスマスをしないうけにいかないから…」という義務感から、クリスマスの準備をするのなら、そういう「クリスマス」はいらない。そのためにキリストはお生ま

れになられたのではないからです。旧約聖書の民は日々、切実に救い主を誕生を祈り願っていました。そこには「もういくつ寝るとお正月」的なアドベントはありません。2023年を生きる私たちが今日、神の救いを求める一人として聖書を開き、友を覚え、世界を覚える祈りの中に、クリスマスを迎えていきたいのです。

さて今朝は、預言者イザヤによる「メシア（救い主）」預言の箇所を開きました。ダビデがイスラエルの12部族の統一王国の王になって約270年。ソロモン王の死後、国は北王国と南王国に分裂してしましますが、それでもなんとか約230年間、二つの王国でイスラエルとして歩んできていたものの、イザヤが預言者として召された時代にととう北王国の一番北部のゼブルンとナフタリの地域がアッシリア帝国の侵略により属国とされてしまいます。この地域は「ガリラヤ」と呼ばれ、ナザレやカファルナウム、カナという新約聖書で馴染みのある地域ですが、異邦人であるアッシリアの手に落ちてしまったのでした。12部族の2部族の領地が失われて、そのあと自分たちはどうなっていくのか。アッシリアの軍事的脅威の前に、人びとの心が恐れと不安に揺れ動いていた時に、預言者イザヤが語ったのが、この9章のメシア預言です。

その内容をひと言でいうなら「主なる神への信頼に立ち帰れ」という励ましです。現実の王たちは北王国も南王国も、北のアッシリアと南のエジプトとどちらと手を結べば生き残れるかという政略に腐心していました。貢ぎ物と使いを送ってご機嫌を伺い、その軍事力の庇護を求めることを重ねていた時に、預言者イザヤは、外国の軍事力に依り頼むのではなく、「主なる神にこそ依り頼む信仰」、主なる神が遣わされる「メシアの救い」と「神の言葉」の前にへりくだる信仰を示したのです。

死の陰の地に住む者を照らす光、深い喜びと大きな楽しみに人びとを導くのは、主なる神の働きである。地を踏み鳴らした兵士の靴、血にまみれた軍服をことごとく火に投げ入れ、必要のない者とされる「一人のみどりご、メシア」が来られる。それは「万軍の主の熱意がこれを成し遂げられる！」と。

さて、このイザヤのメシア預言は2023年を生きる私たちに何を語りかけているのでしょうか。クリスチャンの私たちはこの預言とイエス・キリストが十字架で成し遂げられた平和を重ねて受け取りますが、例えばユダヤ教の人々はこのイザヤのメシア預言をどう理解して、今回のイスラエル軍による軍事侵攻をどう考えておられるのか調べてみました。すると正統派ユダヤ教の人たちは今回の軍事侵攻には毅然と反対していて、「神の国は人間の軍事力ではなく、あくまでも神ご自身が、神の御業によって実現されるものだ！」という信仰に立つべきだと主張されていると知りました。

人間が軍事力で神の平和をもたらそうとするとところに根本的な間違いがあり、神の深い知恵と神が遣わされるメシアの前に謙遜に低くされていく信仰が、キリスト教とユダヤ教の隔てを越えて示されていることを改めて考えさせられたのでした。信仰の違いに目を留めて「敵」を攻撃するのではなく、お互いの違いの中に豊かに働かれるインマヌエルの神を見ていく信仰を、この時、祈り求めていきたいのです。